

中世論理学の意味論的性格

山下正男

論理学の歴史においては、いわゆる近世のルネッサンスの概念は全くあてはまらない。論理学はなるほどギリシアで発見されはしたが、しかし論理学にとって中世は決して暗黒時代とはいえない。いなむしろ中世こそは論理学の開花期であった。ところが、この論理学がルネッサンスになって完全に忘却されたのであり、論理学にとって近世こそはまさに暗黒時代だと断定できるのである。論理学の歴史にとって、中世ほど豊富で厳密な体系が生みだされた時代は見当たらないのである。こういったすぐれた論理体系が近世において忘却されてしまったことは、まことに残念なことであった。ところがこの近世の暗黒時代が、19世紀の終りになってルネッサンスを迎え、20世紀に至ってはじめて、論理学はかつての華やかさをとり戻すのである。

それではこれ程優秀な中世の論理学はいったいどのようなものであり、どのような性格をもっていたのだろうか。いまここでとり上げる中世論理学とは、13世紀ヨーロッパに出現した、きわめて独創的な論理学のことを指す。その創始者はシャイアースウッドのウィリアム、ペトルス・ヒスパヌス、それからオセールのランベルトのトリオである。この三人のほほひかよった三冊の論理学書がつぎつぎと継承され、さまざまな変容を受けて増補、発展させられる。その中でも有名なものがオッカム、ウォルター・パーレー、それからザクセンのアルベルツスの論理学である。これらの論理学をグループマンは *Sprachlogik* と呼んでいる。この論理学は前述したように、近世の始めに忘却されるが、19世紀になって復活される。そして、それは一方においてフッサールやハイデッガーにつながるものであり、

他方においては、ボルツァーノ、タルスキー、カルナップの線につながるのである。しかしここでは、後者との連関で、つまり、意味論的連関で考えてみたいと思う。

ところでこれらの論理学はシュプラッハ・ローギクと呼ばれる。つまりシュプラッハが中心になる。そこでは vox と dictio がはっきり区別される。vox は単なる物理的な音声である。しかし dictio はなんらかのものを意味する言語記号のことである。つまりシュプラッハとは意味をもつ音声記号のことなのである。ペトルス・ヒスパヌスはそれを vox significativa と呼んでいる。つまり中世の論理学は単に音声のみを問題とする論理学でもなく、また単に意味とか概念のみを問題とする論理学でもなく、音声記号と意味の複合されたものを対象とする論理学、音声記号と意味内容の関係の考察を中心とした論理学といえる。つまり現代の論理学の用語でいえば意味論的な論理学といえるのではないかと思われる。

中世の論理学がこうした意味論的性格をもつということと、中世の学問のもつ積義的性格との間にはなんらかの関連があるのかも知れない。積義とはいわゆるエクセゲーゼ、ヘルメノイティック、またはインテルプレタチオと呼ばれるものである。中世では神学者は聖書やセンテンチアエを解釈した。哲学者はアリストテレスやボエチウスを解釈した。法律学者、医学者もそれぞれのテキストを解釈した。ところでテキストとは単なる文字の羅列ではなく、意味を持った文字の羅列なのである。そしてこういったテキストつまり文字記号から、その意味内容を探り出すのがヘルメノイティックの仕事だったのである。

さて、この vox significativa はあきらかにギリシア語の φωνη σηματικη の訳である。そしてこのことこそは明らかに、シュプラッハ・ローギクとアリストテレスの「ペリヘルメネイアス」との連関をものがたるものである。この「ペリヘルメネイアス」はボエチウスによってラテン語に移され、中世に導入されたのである。

ところで12世紀から13世紀にかけて始まった新しい論理学の特徴は、在来の論理学が、まず「イサゴーゲ」や「カテゴリーイ」から出発するに反して、プラエディカピリアやプラエディカメンタの研究より前に、「ペリヘルメネイアス」の問題で始められるということである。つまり論理学の基礎が *vox significativa* に置かれたのである。最初にこのプランを実行したのはソールスベリーのジョンであって、それが例のシャイアースウッドのウィリアム、ペトルス・ヒスパヌス、オセールのランベルトのトリオによって引き継がれる。そしてここに中世論理学の意味論的土台が築き上げられるのである。古代においては、形而上学のみならず論理学においても、ものことば、物理的事物とその記号との間に不当な混同があり、救いがたい混乱が存していたのであるが、意味論はこういった混乱を組織的・根本的に救おうとするものであった。こういった意味論の萌芽は、もちろん古くからあるわけであり、とくにアリストテレスの「ペリヘルメネイアス」には組織的なものがみられるのであるが、中世の論理学はそこから出発しながらもその成果を飛躍的に拡張し、ほぼ現代のセマンティックスの水準と同じに達しているのである。かくして13世紀から始まる中世論理学の性格を意味論的なものと規定し、その内容を現代の意味論との比較において順を追って述べて行こう。

さて、中世論理学の扱う問題のうち、古代論理学には決してなかった三つの問題がある。一つはシュンカテゴレーマの問題であり、一つはスポシチオ論であり、最後はコンセクエンチア論である。そしてこの三つの問題とも、シグニフィカチオの概念を、その根柢に置いているのである。

まず、シュンカテゴレーマについて述べよう。シュンカテゴレーマとは、*omnis, nullus, aliquis, totus* 等のことであって、近代論理学でいう *logical constant* または *incomplete symbol* のことである。オッカムは例を数字の零にとる。「アラビア数字の零は、それだけでは無つまり、なにものをも *significare* しないが、他の数字に付加されると、その数字をし

て何らかのものを意味させる。(つまり0が2に附加されると、0は2と一しょになって20を意味するようになる)それと同じように、シュンカテゴレーマは、それ自身ではいかなるものも *significare* しないが、他の記号に附加されることにより、その記号と一しょになって、なんらかのことを意味するようになる。」(Ockham, *Summa Logicae*, I, c. 4) 近代の記号論理学は周知のように、記号を二種に分け、一つは定項記号 (*constant*) もう一方は変項記号 (*variable*) に分けるのであるが、中世ですでにこの区別がはっきりとなされているのであって、しかもそれが、*significare* の概念に基けられていることは注目に価する。ただし、このシュンカテゴレーマは、「すべて」とか「なんらかの」とか言うようにいわゆる日常言語が使われていることは、完全に人工言語に切り換えられた近代の記号論理学と違った点であるといえる。

つぎにスポシチオの問題に移ろう。いま次のような三つの命題 a, b, c があるとす。a. *Homo est animal.* b. *Homo est species.* c. *Homo est vox dissyllaba.* c'. *Homo est dictio scripta.* この三つの命題において *homo* という言葉、つまり *terminus* が三回出てくるが、この三回とも意味が異っている。第一の場合には、*homo* は現実の人間、ソクラテスとかプラトンを指す。bの場合の *homo* は概念、つまり *intentio animae* を指す。cの場合には、*homo* は *vox* または *scriptum* を指す。このようにして *homo* という *terminus* がどのような対象を指すかということを *suppositio* といい、*terminus* はある場合は現実に存する物を指し、ある場合には概念を指し、或場合には音声または文字記号を指す。そこで *suppositio* には三通りの区別が存する。それらは *suppositio personalis*, *suppositio simplex*, *suppositio materialis* と呼ばれる。かくして論理学において、「もの」、「概念」、「音声または文字記号」の三者の区別が、はっきりおこなわれるのである。ところで、この *suppositio* の区別は、*significatio* の考えを基礎に持っていることに注目しよう。つまり *significare* の対象

significatum はオッカムの場合個々の事物であり、*suppositio personalis* においてはまさにこの *significatum* が *supponere pro* されているが、その他の場合は、この *significatum* が *supponere pro* されていないのである。つまり *suppositio personalis* はまさしく当の *significatum* を指しているという点で本来的であって、他の二つの *suppositio* は派生的であると考えられているのである。(Ockham, S. L. I, c. 64)

以上の考え方は現代のセマンティックスの考え方と同じである。つまり現代のセマンティックスは “mention,” と “use,” を厳密に使いわける。いま次の二つの文章を考える。(1) John is tall. (2) John consists of four letters. 文章(1)において、John は手足を持った人間として出てくるわけではない。その文章が John という人間について語っている (mention) にすぎない。そしてそこでは John の名前が使用されて (use) いるのである。文章(2)においてはしかし人間 John が mention されているのではなく、John の名前が mention されているのであり、文章(2)で use される John はジョンの名前ではなく、John の名前の名前である。(Linsky: *Semantics and the Philosophy of Language* p.4, 1952)

こういった「名前」と「名前の名前」の区別は、中世の *intentio prima* と *intentio secunda* の区別を思わせるものがあるし、また use と mention の区別は、やはりオッカムにおいて *actus exercitus* と *actus signatus* の相違としてあらわされている (Ockham: S.L. I, c. 66)。すなわちオッカムは次の二つの文章を区別する。(1) *Homo est animal.* (2) *Animal predicatur de homine.* そして(1)における *homo* は *actus exercitus* をもち、(2)における *homo* は *actus signatus* をもつとされる。つまり(1)における *homo* は現実に存在する事物として mention され、(2)における *homo* は sign つまり概念記号として mention されているのである。そして(1)における *homo* の *suppositio* は *personalis* であり、(2)における *homo* の *suppositio* は *simplex* なのであるといわれている。つまり(1)では現実的作

用がおこなわれ、(2)では概念記号的作用がおこなわれているのである。

かくして、いま、*suppositio* 論に関する限り、中世の意味論と、現代の意味論が完全に一致することがわかった。次いでコンセクエンチア論に移ろう。

その前に、真理概念もまた *significatio* の考えに基づいていることを述べよう。オッカムによると、命題の真とは主語によって意味された内容 *significatum* と述語によって意味された内容 *significatum* との一致だということになる (Ockham: *Quodl.* VI, q. 5)。ここでも真理概念の基礎に *significatio* の概念が存する。ところで、*significatio* を使用した一層進んだもう一つの真理の定義が見られる。それはザクセンのアルパートによるものである。これと現代のセマンティックスにおける真理概念とを比較してみよう。

タルスキーの考えによると、「Xが真であるための必要かつ十分な条件はPである」という一見トリヴィアルな式で真理概念が表わされる (Linsky: *op. cit.* p.3)。ただしこの場合、Pは命題、Xは命題の名によっておきかえられる。いまPのかわりに命題、雪は白い、Xのかわりに命題雪は白いの名を代入する。そして命題雪は白いの名を、雪は白いに引用符をつけて表現すると、「雪は白い」が真であることの必要かつ十分な条件は雪が白いであるとなる。このトリヴィアルな定義こそ論理的にいて最も正しい真理の定義であって、古来さまざまな真理概念が提出されてきたがすべて論理的に不完全なのである。このタルスキーの定義において、PとXはもちろん同一ではない。Pは命題であり、Xは命題の名である。Pは単に事実を述べるという命題本来の働きをしているが、Xは、それについて真偽がうんぬんされているわけであるから、Xは命題そのものではなく、命題の名前という資格で扱われているわけである。つまり、「雪は白い」が真であることの必要かつ十分な条件は雪が白いである、という場合の、最初の雪は白いは、*suppositio materialis* であり、二度目の雪は白いは、

suppositio personalis として扱われねばならないのである。

さてこういったタルスキーの真理概念の定義はアリストテレスの「ペリヘルメネイアス」にまでさかのぼる。そこでは次のように述べられている。(Arist. De Inter. 18a40—b3)「あるものが白いと語ることが真であれば、あるものは白く、逆に、あるものが白ければ、あるものが白いと語ることが真である。」これは全く現代のセマンティックスにおける真理の定義と同じである。あるものが白いと語ることが真であるというとき、あるものが白いという命題は語られ (φάσαι) る、つまり mention され、単にあるものが白いというとき、命題は use されているわけである。以上現代セマンティックスとアリストテレスのペリヘルメネイアスの真理概念を参考にして、ザクセンのアルベルツスの真理の定義を考察してみよう。

ビューリダンの論理学書および、ザクセンのアルベルツスの論理学には次のような文章がみられる。

Propositio vera est illa, quae qualitercumque significat, ita est. Propositio autem falsa est illa quae non qualitercumque significat, ita est.

(Albert v. Sachsen: Logica perutilis)

この意味はつぎのとおりである。「命題が *significare* したまさにそのように事態が存立すれば、その命題は真であり、命題が *significare* したようには事態が存立しなければ、その命題は偽である。」すなわち命題が真であるといえるのは、事態の存立をまつわけであって、事態の存立と命題そのものは区別され、真偽は命題に関してのみいわれうるわけである。そして事態の存立が、命題という言葉によって表現されているとすれば、真偽がうんぬんされる命題は、それより高次でなければならぬ。すなわち前者において命題は use され、後者において命題は mention されているわけである。先にスポシチオ論において *significatum* と *terminus* と *terminus* の名前の三者を区別したが、命題の場合にもやはり命題の *significatum* と命題自身と命題の名の三者を区別しなければならない。いまの場合

命題の *significare* する対象、命題の意味が *significatum* であり、命題自身は「事態かくの如し」であり、真偽がうんぬんされるところのものが命題の名なのである。つまりここにおいても命題と命題の名がはっきり区別されているのであって、更にその上に、この二つの言語の段階が *significare* の概念によって巧妙に関係づけられているのである。

真理概念に関してこれだけの準備をなしたのち、コンセクエンチア論にとりかかろう。

まずオッカムのコンセクエンチアに対する考えを調べてみよう。オッカムにとって、「コンセクエンチアとは *conditionalis* つまり *si* の関係と同じである。そしてこの *conditionalis* が真なるための条件は、前件が後件を *infer* することである。」ここで *conditionalis* と *inference* がはっきり区別され *inference* は *conditionalis* の真なることとされている。バーレーでも同様であって、すべての *conditionalis* が妥当なのではなくて、*conditionalis*、すなわち *consequentia* を妥当ならしめるものは *consequentia* の *regula* であるとされ、*consequentia* と *regula* がはっきり区別されている。(Walter Burleigh : *De Puritate Logicae*)

以上オッカムとバーレーの両者にみられる区別は Quine による区別と全く同じである (Quine : *Methods of Logic* pp. 37—38)。クワインによれば *implication* が成立するということは *conditional* が妥当することに外ならない、つまり、*implication* は *conditional* の *validity* に外ないのである。そして *implication* の関係にある二つの命題は *mention*, *conditional* の関係にある二つの命題は *use* されているのである。一般に *conditional* と *implication* は同じではなく、*conditional* は真なる場合も偽なる場合もあり得る。したがって *implication* をおこない *inference* をおこなうためには、*conditional* が真でなければならない。そして *conditional* について真偽をうんぬんすることは、それをセマンティカルに扱うことに外ならないのである。そしてクワインのいう *conditional* は *consequentia*

のことであり、implication は consequentia の regula のことであり、inference のことである。以上の区別は、真偽概念の場合と同じように、トリヴィアルに見えるが、この反省を欠いたため、ラッセルのプリンチピアは混乱に陥っているし、ギリシア以来のいろいろのソピスマが生じるのである。

このような準備をした上で、ザクセンのアルバートのコンセクエンチアの理論を考察してみよう。そのテキストは次のとおりである。

Ista propositio dicitur antecedens ad aliam, quae sic se habet ad eam, quod impossibile est qualitercumque est significabile per eam,……sic esse, quin, qualitercumque alia significat sic sit. (Albert v. Sachsen : *Logica perutilis*)

その意味はおよそつぎのとおりである。「ある命題ともう一方の命題がつぎのような関係にあるとき、すなわち、一方の命題が *significare* したまさにそのように事態が存立し、他方の命題が *significare* したまさにそのようには事態が存立しない、ということが不可能であるとき、一方は他方の前件である。」アルベルツスにおいても、*consequentia* または *conditionalis* と、*consequentia* の *regula* は区別されている。そしていまの場合 *regula* ないし *inferentia* は、「一方は他方の前件である」という表現によってあらわされている。それなら *conditionalis* の妥当はどうあらわされているだろうか。ここで「一方の命題が *significare* したまさにそのように事態が存立し、他方の命題が *significare* したまさにそのようには事態が存立しない」という特徴あるいまわしが、前にも見られたものであることを思い出そう。つまり命題の真偽についてのザクセンのアルベツスのことばである。それを利用すると、「一方の命題が真で他方の命題が偽であることが不可能であるとき、一方の命題は他方の命題の前件である」となる。この関係は近代の論理学でも同じであって、クワインの定義 (Quine : *Methods of Logic* p.33)「二つの文章 S_1, S_2 があって、 S_1 を真、 S_2

を偽とする解釈がないとき、またそのときに限り、それゆえ、前件が S_1 で後件が S_2 である conditional を偽ならしめる解釈がないとき、またそのときに限り、 S_1 は S_2 を implicate する。一言でいえば、implication とは conditional の妥当なることである」と同じことをいっているわけである。つまり前件と後件の間における implication の成立は、conditional が偽でないこと、つまり conditional の妥当に外ならないのである。そしてこれはまさに前述の consequentia の regula や consequentia の妥当に相当するのである。アルベルツスは真理概念の定義の場合と同様、事態の存立と、真偽のうんぬんされる命題とを区別しているのであって、前者においては命題が use され、後者においては命題が mention されているのである。そして conditional では命題は use され、implication では命題が mention されているのであり、conditional は事態同士の関係をのべ、implication では命題同士の関係をのべる。そして conditional では二つの命題が結合され implication では命題の名前が結合される。かくして implication は命題についての命題であり、高次言語なのである。しかもこの二つの段階の間の関係は significare の関係にもとづけられているのである。

以上のことから中世のコンセクエンチア論におけるコンセクエンチアとレグラの関係は significare の関係にもとづくということが明らかになった。そしてレグラの概念は、近代論理学のいわゆる implication の概念と同じであることも明らかになった。

かくして、中世論理学の特徴をなすシュンカテゴレーマ論、スポシチオ論、真理論、コンセクエンチア論のすべてにおいて、その根柢に significatio の考え方がひそみ、完全にセマンティカルな操作が施されて（前二者は terminus をめぐって、後二者は propositio をめぐって）いることがわかった。これだけ徹底したセマンティカルな考察は古代のアリストテレスにもストアにも見られないのであって、ここに中世論理学の独創性がみられるのである。

こういったすぐれた中世論理学の意味論は20世紀になって再び復活するのであって、それは主としてポーランドの学者のタルスキーによって成し遂げられた。その両者の体系の近似性はおどろくべきものがあり、しかもターミノロジーまで近似していることから恐らくタルスキーは彼の意味論の建設に当って大いに中世の論理学を参照したものと思われる。

ただ両者のセマンティックスの相違を強いて言えば、近世ではまず、シンタックスつまり、「始めに記号ありき」というスローガンによる徹底した形式主義から出発し、そこから記号主義、形式主義の欠陥を補う形でセマンティックスが出てくるのであるが、中世は、論理学の根柢が始めから *significatio* の考え方に貫かれておったのであり、論理学即意味論といっても過言ではないと思われる。また近代のセマンティックスが *artificial language* に対するセマンティックスであるに対し、中世のセマンティックスが *ordinary language* に対するそれであるということも相違点になると思われる。しかしいずれにしても、中世の論理学が意味論的性格を極めて強く持っているということ、しかも、それは現在のセマンティックスと相おおうものであるということは、はっきり断定できることと思われる。

附 記 ——本稿は昭和38年10月14日開催の九州大学における第10回中世哲学会に際しての研究発表の草稿に加筆したものである。